

小学校中学年における 面かぶりクロール習得のための学習指導に関する研究

スポーツ文化研究領域

5010A022-9 金沢 翔一

研究指導教員：吉永 武史 准教授

【問題の所在】

2008（平成20）年1月に出された中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」答申では、児童生徒に基礎的・基本的な知識や技能を習得させることの重要性が示され、2011（平成23）年4月より完全実施となった小学校学習指導要領では、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てることが体育科の目標として示された。水泳系については、「原則として第4学年で指導する」としてされていたが、今回の改訂によって第5学年からの取扱いとなり、高学年の「水泳」では、クロールならびに平泳ぎにおいて、「続けて長く泳ぐこと」が技能に関する内容として示されている。小学校中学年から高学年にかけての段階は、新しい運動がすばやく習得される運動の「最適学習期」とされている（マイネル, 1981）。これらのことから小学校中学年では、高学年での技能目標として位置付けられている「長く泳ぐ」ために必要な基礎を身に付けておく必要があると考えられる。

【本研究の目的】

本研究では、小学校学習指導要領解説の体育編において、高学年の技能目標として示されている「クロールで続けて長く泳ぐこと」を達成するための前段階として、同書において中学年の浮く・泳ぐ運動の内容の面かぶりクロールの習得に向けた学習指導プログラムの作成ならびにその有効性について検証する。

【先行研究の検討】

学習指導要領の改訂とともに水泳系の授業の目標や内容も変容しており、どの指導方法にお

いても良い点悪い点が存在し、児童の実態に合わせた指導方法を用いることが重要であるといえる。多くの実践が行われている面かぶり型のクロール指導は、そのほとんどが一単元でバタ足、面かぶりクロール、クロールまで行うものが多く（滝沢, 1984）、面かぶりクロールの習得を学習目標の中心とした実践は僅少で、指導内容も不明確であった。このことから、面かぶりクロールの習得を意図した研究が必要である。

【各章の概要】

<第1章>

第1章では、面かぶりクロールの習得に求められる技術的条件を明らかにした。その際、面かぶりクロールにおける推進力や浮力の重要性について述べ、技術的なつながりを明らかにする。次に、面かぶりクロールのその習得にむけた評価基準とその習得に向けた学習指導プログラムを作成した。水泳運動の評価基準に関する研究は、けのび動作やクロール動作の観察評価に基づき作成されたものでなかったり、観察評価に基づいて作成されたものであったとしても、バイオメカニクスの知見をもとに検討が試みられていなかったりした。そこで、本研究では、田嶋ほか（2010）や合屋ほか（1992）の研究を参考にしながら、先行研究でなされていないバイオメカニクスの知見を加えていきながら、面かぶりクロール習得に向けた具体的な評価基準を作成した。次に「けのび」、「面かぶりバタ足」、「面かぶりクロール」の順に教材を配置し、単元前半では、「泳ぐために必要な技術を身に付けるようにする」ことを目標とし、単元後半では、「身に付けた基礎的な技術を活かしながら、面かぶりクロールができるようにする」ことを目標とした学習指導プログラムを作

